

言語聴覚療法とADLの関連調査

腰塚 洋介¹⁾ 風晴 俊之¹⁾ 美原 盤²⁾

1) 公益財団法人脳血管研究所 附属美原記念病院 リハビリテーション科

2) 公益財団法人脳血管研究所 附属美原記念病院 院長

[はじめに]回復期リハビリテーション(リハ)病棟の役割は、ADLの向上を図り、家庭復帰を促進することにある。今回、言語聴覚療法がADLに影響を与えているか調査した。

[方法]平成19年4月～平成25年3月までに当院回復期リハ病棟に入棟した初発脳卒中患者1017名を対象とした。まず言語聴覚士が介入した患者(介入群)713名と未介入の患者(未介入群)304名に2分類し、さらに各群でFunctional Independence Measure (FIM)の点数が40点未満を重度群、40～80点を中等度群、81点以上を軽度群に3分類した。介入群において重症度毎にFIM利得と、一日あたりの理学療法・作業療法合計単位、および言語聴覚療法単位のそれぞれについて相関関係を調査した。また、重症度毎に介入群と未介入群の在棟日数比較を行った。

[結果]一日あたりの理学療法・作業療法合計単位とFIM利得の間に有意な相関関係を認めた($p < 0.05$)。一方、一日あたりの言語聴覚療法の単位とFIM利得の間には有意な相関関係は認めなかった。また、介入群は未介入群に比し、中等度群と軽度群で在棟日数が有意に長かった($p < 0.05$)。

[考察]言語聴覚療法はADLに直結しないことが示唆された。言語聴覚療法は、ADL獲得において、コミュニケーションや食事など一部であり、他の動作獲得との関連は薄く、対象者も限定される。現行の診療報酬制度は、職種に関わらず9単位/日を上限としており、ST介入者と未介入者では理学療法や作業療法の実施単位が異なる。そのため、在棟日数が長期化していることが示唆された。言語聴覚療法は他のリハ単位とは別に、付加的な設定にされることが望まれる。